

# コルシカ語方言学の諸問題

渡 邊 淳 也

## 1. はじめに<sup>1</sup>

本稿はコルシカ語を対象とする方言学におけるいくつかの問題を概観するとともに、考察をくわえることを目的とする。コルシカ語 (*lingua corsa*) は、イタロ＝ロマンス諸語のひとつであり、人口約 33 万人のコルシカ島の住民の半数ほど、ならびに各地にうつり住んだ島民によって話されている。また、カプライア島、マッダレーナ島、そしてサルディーニヤ島北部のガッルーラ地方の諸方言もコルシカ語の一種とされる。

コルシカ語には単一の標準語が存在せず、あえて多数の方言にひとしい規範性をあたえる「多規範的」(*pulinomicu*) な言語政策がおこなわれており、ひろく受けいれられている。「多規範的」な言語とは、この概念を提唱した Marcellesi (1984, p.314) によると、「その単一性が抽象的であり、単一の規範のたんなる化石化ではなく、弁証法的な動きに由来するような言語、また、その存在が当該言語を話すひとたちによる、特定の名をあたえるという、そしてほかのよく知られた言語からは自律しているという、集団的断定にもとづくような言語」<sup>2</sup> と定義される。ここでいう「弁証法的な動き」とは、話者のあいだでの言語意識の糾合や、諸方言のあいだでの調整によって、ひとつの言語としてのまとまりに関してある程度の共通理解が形成されるということである。この概念化は一見あまりに抽象的で、現実には成立しがたいようにみえるかもしれないが、あとでみるように (3.1 節)、コルシカ語にはたしかに「多規範的な言語」の理念を結実させているといえるような事例が存在する。

コルシカ島は面積が約 8,680km<sup>2</sup> で、日本でいうと広島県や兵庫県より少し広いくらいである。地形はたいへん山がちで、島を北西から東南にななめに横断して急峻な山脈がそびえており、最高峰チントゥ (*Cintu*) 山は標高が 2,706m もある。冬は高地で積雪し、ギゾーニ (*Ghisoni*) などにはスキー場もある。山脈を横断して 2 大都市バスティーア (*Bastia*) とアヤッチュ (*Aiacciu*) を結ぶコルシカ鉄道の本線が開通するまでは、冬場は陸路で山越えができなかった。また、この山脈を縦走するコースは、《GR20》または《*Fra li Monti*》とよばれる最上級者向けのトレッキング

<sup>1</sup> 本稿は科学研究費補助金 (JSPS Kakenhi) 基盤研究 (B) JP-18H00667 (研究代表者：山村ひろみ)、ならびに同 (C) JP-20K00565 (研究代表者：渡邊淳也) の助成をうけて遂行された研究の成果の一部である。

<sup>2</sup> « langues dont l'unité est abstraite et résulte d'un mouvement dialectique et non de la simple ossification d'une norme unique, et dont l'existence est fondée sur l'affirmation massive de ceux qui la parlent, de lui donner un nom particulier et de la déclarer autonome des autres langues reconnues »

ルートである。山脈にへだてられ、行き来もしづらかったことから、島内には面積のわりにたいへん多様な方言が分布しており、方言学・言語地理学に格好の題材を提供する。

以下、本稿はつぎに示すような手順からなっている。2節では、コルシカ語の方言区分について、伝統的にいわれてきたチスモンテ・プモンテの二分法と、調査によって提唱されるようになったいっそう精緻な区分を概観するとともに、区分のもっとも確実な基準となる強勢母音の体系的な地域的差異を確認する。3節では、本稿が関心をいだく子音弱化 (*lenizione cunsunantica*) の現象について、最新の方言地図に即して確認するとともに、その分布について考察する。この現象についても、実情を考慮に入れると、伝統的な見かたがそのままでは通用しないことが示されることになる。

## 2. 方言区分

### 2.1 伝統的な二分法

伝統的には、コルシカ島を北東部と西南部にわける山脈におおよそ沿った境界線によって島を二分し、北がわをチスモンテ (Cismonte)、南がわをプモンテ (Pumonte) とよぶ。チスモンテとは「山のこちらがわ」、プモンテとは「山のむこうがわ」を意味する。かつてコルシカ島を支配していたピサからみて (つまりはイタリア半島の中部からみて)、近いがわを「こちらがわ」と呼んだのである。これらは、2017年末まで存在した「高コルシカ県」(*Corsica suprana*; フランス語 *Haute Corse*) と「南コルシカ県」(*Corsica suttana*; フランス語 *Corse du Sud*) のふたつの県に相当する<sup>3</sup>。

一方、方言の差異という点では、旧県境とはことなる境界線がひかれていた。もちろん、どのような言語的特徴を考慮に入れるかによって方言区分は変わってくるが、ここでは一応の最大公約数的な提示として、Gaggioli (2012, p.25) による区分を参照するとともに、この地域区分におおよそ対応する現象のごく一部をみておこう。Gaggioli によると、南北をわけるもっとも重要な境界は、おおよそ、サーリ・ドゥルチヌ (*Sari-d'Urcinu*) — ビッツァウオーナ (*Vizzavona*) — ギゾーニ (*Ghisoni*) を通る。これより南では、非強勢の位置に /ɛ/ があらわれなくなる。例：北部 *vene*、南部 *vena* 「来る」。そして、北部では /b/ と /v/ の弁別がなく、/b/ に統合される (このことを「B音化」(*betacismu*) という) が、南部では /b/ と /v/ の弁別がある。例：北部 *vinu* [b'inu]、南部 [v'inu] 「ワイン」。また、北部の -ll- が南部では -dd- にかわる。例：北部 *bolla*、南部 *bodda* 「泡」。さらに、極南部では、-gli- も -dd- になる。また、極南部では、-dd- が歯音 (*dentale*) の /d(d)/ ではなく、そり舌音 (*cacuminale*) の /d̪(d̪)/ で発音される。例：北部・南部 *fam(m)iglia*、極南部 *famidda* 「家族」。一方、北部を東西にわける境界線がわかる相違との例としては、北東部には島のほかの地域にはない音素 /æ/ が存在することがあげられる。例：*erba* 北部 [ɛrba]、北東部 [ɛærbə] 「草」。ほか、概略的には北部では南部より子音弱化的な現象もあるが、これについては3.1節でふれる。

教育的文脈などで、概説的にコルシカ語について述べる場合には、以上のような一般的な図式

<sup>3</sup> ふたつの県は2018年1月1日に合併され、かねてより存在していた全島レベルのコルシカ地域共同体 (*Culettività territoriale di Corsica*) に統合された。

がひろく共有されている。この図式は、まず特徴をおおづかみするには有効であるが、具体的な調査にもとづいていなかったり、さまざまな特徴の差異を平均して単純化していたりするので、とくに個々の現象に即してみるならば、修正を必要とするところも少なくない。

## 2. 2 強勢母音の体系による区分

Dalbera-Stefanaggi (2001)、(2002)、(2015) は、ラテン語からコルシカ語への移行における強勢母音の体系全体の帰趨を、各方言をもっとも根柢的に特徴づける、確かな基準として重視している。強勢母音体系の帰趨は、地域ごとにもっとも安定した、規則的な特徴を示すからである。

一般的な図式としては、ラテン語からロマンス諸語への母音体系の推移は、ラテン語の5母音、2音量（ここでいう「音量」 *quantità* とは、母音の長短の古典的呼称である）からなる体系から、ロマンス諸語の7母音、1音量（すなわち、母音の長短が共時的には弁別特徴とならない）からなる体系への推移として理解できる。つまり、母音の長短が失われたかわりに、母音音素が増えたのである。この変化はロマンス諸語全般にひろく共通しており、その一般的図式は、つぎの図1のように示すことができる。

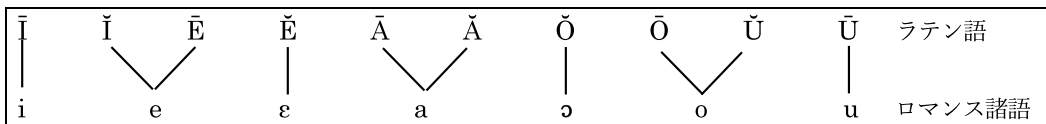


図1：ロマンス諸語の一般的母音体系

そして、強勢母音体系にもとづいて区分すると、4つの方言圏をみとめることができる。以下、北方から順に、それぞれの方言圏と、対応する強勢母音体系について述べる。

### 1/ コルシカ岬半島方言圏：半開・半閉母音融合型

コルシカ岬半島方言圏の特徴は、現在ではコルシカ岬半島のわずか1か所（ムルスイーリア *Mursiglia*）でしかみられない。かつてはコルシカ岬半島（*Penisola di Capicorsu*）全体にひろがっていたと推定されるこの方言圏の範囲が歴史的に縮小してきた結果である。

この方言圏の強勢母音体系は、図2によって示される。さきにロマンス諸語の一般的な母音体系として示した7つの母音のうち、/e/ と /ɛ/、/o/ と /o/ の弁別が消失し、それぞれ /e/、/o/ に収束しているものである。この体系を、「半開・半閉母音融合型」とよぶことにしよう<sup>4</sup>。ただし、融合して音韻的対立がなくなった結果、/e/、/o/ の実現は [e] から [ɛ]、[o] から [ɔ] にむけて可変

<sup>4</sup> Dalbera-Stefanaggi (2002, p.68) には、「中母音中和型」(type à neutralisation des voyelles moyennes) との呼称がみえるが、本稿では「中和」という用語をもちいず、「融合」とした。その理由は、Martinet (1980, pp.76-80) の用語法にならって、「中和」(neutralisation) を、ある限られた環境で音素間の対立がなくなる一方、別の環境では当該音素間の対立が存在する場合（すなわち、Martinet のいう「部分的相補性」(complémentarité partielle) がみられる場合) に限って用いたいと考えたためである。コルシカ岬半島方言圏においては、半開・半閉母音の弁別は全面的に失われているため、Martinet のいう「中和」にはあたらぬ。

的である。

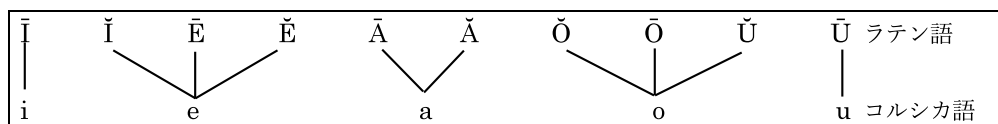


図2：半開・半閉母音融合型の強勢母音体系 (Dalbera-Stefanaggi 2001, p.150)

以下、ラテン語からコルシカ岬半島方言への対応の典型例をあげておく<sup>5</sup>。

- |                                    |                                  |
|------------------------------------|----------------------------------|
| Ī : FĪLU > filu [f'ilu] 「糸」        | Ĩ : PĪLU > pelu [p'elu] 「しっぽ」    |
| Ē : MĒ(N)SE > mese [m'eze] 「(暦の)月」 | Ĕ : VĔSPA > vespa [b'espa] 「蜜蜂」  |
| Ā : PĀCE > pace [p'adʒe] 「平和」      | Ă : MĀRE > mare [m'are] 「海」      |
| Ō : FLŌRE > fiore [f'ore] 「花」      | Ŏ : RŎTA > rota [r'oda] 「車輪」     |
| Ū : LŪNA > luna [l'una] 「(天体の)月」   | Ŭ : FŬRNU > fornu [f'ornu] 「かまど」 |

## 2/ 中・北部方言圏：逆転トスカーナ型

つぎに、中・北部方言圏は、方言の4区分のなかではもっとも広く、島全体の3分の2近くを占める。バスティーア (Bastia)、カルビ (Calvi)、コルティ (Corti) などがふくまれる。アヤッチュ (Aiacciu) も、周縁部ながらこの方言圏に属する。この記述には2.1節でみた北東部の特異性は反映されていないが、この点についてはあとで述べる。この方言圏の強勢母音体系は、図3によって示される。

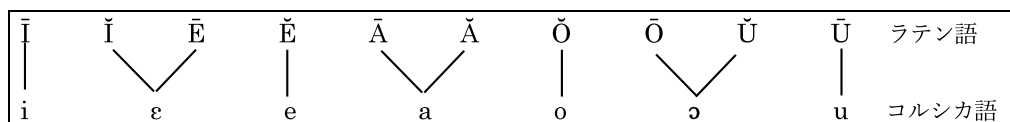


図3：逆転トスカーナ型の強勢母音体系 (Dalbera-Stefanaggi 2001, p.150)

図3の強勢母音体系を、さきに図1でみた一般的な対応関係と比較してみよう。すると、/e/ と /ɛ/, /o/ と /ɔ/ が逆転していることがわかる。このことを Rohlfs (1966-1969, vol.1, p.9) は「旧来の『音質』の奇妙な逆転」(singolare inversione delle antiche 'qualità') と形容している。Dalbera-Stefanaggi (2001, pp.155-156) によると、この逆転は、Ĕ > /ɛ/ > /je/ > /je/ > /e/, Ŏ > /ɔ/ > /wo/ > /wo/ > /o/ のように、二重母音を経た結果、半母音の影響で開口度が極度に(かつての /e/, /o/ を追い越すほど)小さくなったことによる。その結果、かつての /e/, /o/ は音韻体系のなかで /ɛ/, /ɔ/ へと再解釈されたものの、いまなお、音実質としては他の地域にみられる /e/, /ɔ/ より小さな開口度で実現される。

以下、ラテン語から中・北部方言への対応の典型例をあげておく。

<sup>5</sup> IPAの通則には反するが、本稿では『新コルシカ言語地図』の慣習にならって、強勢記号'を強勢音節の直前ではなく、強勢母音の直前にする。

Ī: FĪLU > filu [f'ilu] 「糸」	Ī: PĪLU > pelu [p'ɛlu] 「しっぽ」
Ē: MĒ(N)SE > mese [m'ɛze] 「(暦の) 月」	Ē: VĒSPA > vespa [b'ɛspa] 「蜜蜂」
Ā: PĀCE > pace [p'adʒɛ] 「平和」	Ā: MĀRE > mare [m'arɛ] 「海」
Ō: FLŌRE > fiore [fj'ɔrɛ] 「花」	Ō: RŌTA > rota [r'ɔda] 「車輪」
Û: LÛNA > luna [l'una] 「(天体の) 月」	Û: FÛRNU > fornu [f'ɔrnu] 「かまど」

つぎに、北東部においては、/æ/ が存在する。これは元来は /ɛ/ の条件変異体であった。条件変異体として [æ] があらわれていたのは、ラテン語で Ē のあとに R+ 子音、または N が来ていた語の後裔となる語においてである。例: HĒRBA > erba [r'æɾba] 「草」、FĒNU > fenu [f'ænu] 「稈(まぐさ)」、VĒNTU > ventu [b'æntu] 「風」。しかしいまでは、/æ/ と /a/ の最小対立例として bè [b'æ] 「よく」と vâ [b'a] 「彼(女)は行く」、/æ/ と /ɛ/ の最小対立例として te' [t'æ] 「保て」と tè [t'ɛ] 「きみを/きみに」をあげることができるので、/æ/ は北東部方言において第8の母音音素になっているといえる。

### 3/ ターラヴ方言圏：ターラヴ型

つぎに、ターラヴ方言圏は、コルシカ島の南方、ターラヴ (Taravu) 川流域を中心としてひろがる方言圏である。プルプリアー (Pruprià)、スッドカロー (Suddacaré)、ウルメートゥ (Ulmētu) などをふくむ。この方言圏の強勢母音体系は、図4によって示される。

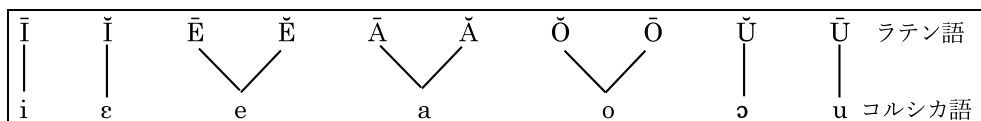


図4：ターラヴ型の強勢母音体系 (Dalbera-Stefanaggi 2001, p.150)

この体系の特色は、やはり図3の一般図式と比較すればわかるように、Ī、Û の調音が弛緩して /ɛ/、/ɔ/ になっても、それらが Ē、Ō 由来の母音と混同されることがなく、Ē は Ē と、Ō は Ō と混同されたことである。この扱いは、上記2/ でみた逆転トスカーナ型と、下記4/ でみるサルディーニャ型との中間に位置することがわかる。

以下、ラテン語からターラヴ方言への対応の典型例をあげておく。

Ī: FĪLU > filu [f'ilu] 「糸」	Ī: PĪLU > pelu [p'ɛlu] 「しっぽ」
Ē: MĒ(N)SE > mesi [m'ɛzi] 「(暦の) 月」	Ē: VĒSPA > vespa [v'ɛspa] 「蜜蜂」
Ā: PĀCE > paci [p'atʃi] 「平和」	Ā: MĀRE > mari [m'ari] 「海」
Ō: FLŌRE > fiori [fj'ori] 「花」	Ō: RŌTA > rota [r'ota] 「車輪」
Û: LÛNA > luna [l'una] 「(天体の) 月」	Û: FÛRNU > forru [f'ɔrnu] 「かまど」

### 4/ コルシカ・ガッルーラ方言圏：サルディーニャ型

コルシカ島極南部から、南どなりのサルディーニャ (Sardigna) 島ガッルーラ (Gallura) 地方にかけてひろがる方言圏は、「コルシカ・ガッルーラ方言圏」とよばれる。ブニファーツイウ海峡をはさんでサルディーニャ島のガッルーラ地方までが一体の方言圏であるため、このような名称

があたえられている。コルシカ島内では、サルテー (Sartè)、ポルティウエチュ (Portivechju) などをつくむ。ただし、コルシカ島からサルディーニャ島にまたがっているにもかかわらず、コルシカ島最南端のブニファーツィウ (Bunifaziu) は例外であり、「ブニファーツィウのリグーリア語」(liguru bunifazincu) とよばれる、ジェーノヴァの強い影響をうけた方言の孤島を形成している。この方言圏の強勢母音体系は、図5によって示される。

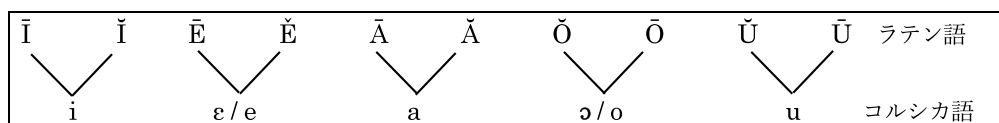


図5：サルディーニャ型の強勢母音体系 (Dalbera-Stefanaggi 2001, p.149)

この体系は、ラテン語からみると、母音ごとに長短の弁別をなくすること（聖アウグスティヌスのいう「アフリカの耳」Afræ aures）で成り立っている。コルシカ・ガッルーラ方言の  $\varepsilon / e$ 、 $\circ / o$  は開音節で広く、閉音節で狭い条件変異体である。例：mesi [m'ɛzi] 「(暦の) 月」、vespa [v'ɛspa] 「蜜蜂」、rota [r'ota] 「車輪」、notti [n'otti] 「夜」。

以下、ラテン語からコルシカ・ガッルーラ方言への対応の典型例をあげておく。

Ī: FĪLU > filu [f'ilu] 「糸」	Ï: PĪLU > pilu [p'ilu] 「しっぽ」
Ē: MĒ(N)SE > mesi [m'ɛzi] 「(暦の) 月」	Ĕ: VĔSPA > vespa [v'ɛspa] 「蜜蜂」
Ā: PĀCE > paci [p'atʃi] 「平和」	Ă: MĂRE > mari [m'ari] 「海」
Ō: FLŌRE > fiori [f'ori] 「花」	Ö: RÖTA > rota [r'ota] 「車輪」
Ū: LŪNA > luna [l'una] 「(天体の) 月」	Û: FŪRNU > furru [f'urru] 「かまど」

以上でみてきたように、強勢母音の体系を基準にした場合、コルシカ語に4つの方言圏をみとめることができる。このようにして立てられた地域区分は、3.2節でおこなう子音弱化に関する考察もふくめ、ほかの現象に関する議論にも基盤として役立つものである。さらには、コルシカ語の諸方言をロマンス語全般（とくにイタロ＝ロマンス諸語）の文脈のなかに位置づけてゆくためにも必要となる<sup>6</sup>。

これまでみてきたような強勢母音の分布は、どのような経緯を経て形成されたのであろうか。この問いに対して、Rohlf (1966-1969, vol.1, p.88) は、とくに逆転トスカーナ型の母音体系について、「(予期される [e] のかわりに出てくる) [ɛ] の音は、ある時期に島外からの影響で発展したものであることは明らかである。その時期には、いまでは島の極南部だけで保たれているコルシカの古い母音体系が、新しい母音体系に場所をゆずったのである。」<sup>7</sup> と述べている。すなわ

<sup>6</sup> 2.2節でみた例には、母音変化 (svucalatura) の現象と、その地域差もあらわれていたが、本稿ではとりあげる余裕がないので、これらについては別の機会に扱うことにしたい。

<sup>7</sup> « è chiaro che tale [ɛ] (in luogo della normale [e] che ci saremmo aspettati) si è sviluppata sotto influssi stranieri in un periodo in cui l'antico vocalismo còrso, che si è conservato soltanto nell'estremità meridionale dell'isola, stava cedendo il posto ad un nuovo sistema vocalico. »



ち、11世紀初頭からはじまるトスカーナ化以前には、サルディーニャ型の母音体系が、コルシカ島全体（のみならずサルディーニャ島、シチーリア島などの島嶼部）にひろがっていた。そこへトスカーナ型の母音体系が島に入ってきて、旧来の体系をおきかえた。しかしその影響のおよびかたに濃淡があったために、現在の方言差が生まれたのである。この新旧の層は、強勢母音体系のみならず、ほかの現象をもひろく規定している。

### 3. 子音弱化とその実態

#### 3. 1 子音弱化と子音交替

「子音弱化」(lenizione cunsunantica) という用語にはふたつの意味がある。ひとつは通時的な現象であり、ラテン語から現代ロマンス諸語にいたる歴史に沿って、閉鎖音が摩擦音や接近音になったり、無声音が有声音になるなど、子音の調音が弛緩してきた変化をさす。もうひとつは現代コルシカ語で、同じ語や形態素にふくまれる語彙的基底をなす子音が、語句のなかでおかれる位置によってことなる実現形をもつ現象のことをいう。とくに後者のみに限定して言及したいときは「子音交替」(mutazione cunsunantica または scunsunatura) ということにする。

通時的弱化について小林(2019, p.194)から例を借りると、ラテン語 IOCĀRE (古典語形は IOCĀRĪ) の後裔は、西から順にポルトガル語 jogar、スペイン語 jugar、カタルーニャ語 jugar、フランス語 jouer、イタリア語 giocare、ルーマニア語 juca となっている。西方にある前の4つはラテン語の子音 /k/ が /g/ に、または無音にまで弱まっているのに対し、東方にある後の2つは /k/ のまま保たれている。このようなことから、閉鎖子音の弱化は西ロマンス語を特徴づける現象であるといわれ、西ロマンス語と東ロマンス語をわける特徴のひとつとされる。ところで、周知のように、西ロマンス語と東ロマンス語の境界はイタリア半島の途中にあり (La Spezia-Limini 線)、北イタリアは西ロマンス語の圏域である。コルシカは13世紀から18世紀までジェーノヴァの支配を受けていたので、コルシカ語の子音弱化の要因としてジェーノヴァの影響を想起するかもしれない。しかし、コルシカ語が全体としてジェーノヴァのリゲーリア方言からうけた影響はきわめて限定的であり、その痕跡は点在している程度である<sup>8</sup>。一方、Rohlf s (1966-1969, vol.1, pp.278-291)によると、コルシカ語にもっとも大きな影響をあたえた周辺部トスカーナ方言にも、閉鎖音が摩擦音になったり、無声音が有声音になったりする子音の弱化がみられるのであり、コルシカ語の子音弱化のおもな源泉は周辺部トスカーナ方言にあると考えるほうが穏当であろう。

つぎに、共時的な意味での子音交替は、ある語や形態素の語彙的な基底形をなす子音が、語句のなかで占める位置に応じてことなる音声的实现をもつという現象である。休止(書記的には句読点)のあと、子音のあと、截語(parolle mozze; 語末に強勢がおかれる語)のあとが「強い位置」であり、それ以外は「弱い位置」である。強い位置での実現形を「強形」(realizzazione pretta)、弱い位置での実現形を「弱形」(realizzazione frolla)という。

Dalbera-Stefanaggi (2002, p.123)に出ている例を用いて説明しよう。trè pani「3個のパン」では、[tr'ɛ]という截語のあとに pani [p'ani] (pane [p'ane]「パン」の複数形)が来ているので、強

<sup>8</sup> Dalbera-Stefanaggi (2001, pp.217-219) および Dalbera-Stefanaggi (2002, pp.12-13) を参照。

い位置ということになり、[tr'ɛpp'ani] と強形が出る。それに対して、u pane 「定冠詞+パン」では、[u] という無強勢母音のあとなので、「弱い位置」である。このため子音が弱化し、[ub'ane] となる。重要なことは、こうした音の変化にかかわらず、問題の子音のつづり字は p のままにしておくということである。ある語が位置によってつづり字を変えないことにより、その語の語彙としての同一性が保たれ、さらには、弱化が多い変種と少ない変種のあいだにある方言差を吸収でき、(とくに書いたときの) 意思疎通が容易になるという利点がある。強い位置、弱い位置を通して、一貫して p と書くことこそ、多規範的言語であるコルシカ語の抽象的なまとまりを保証しているのである。

子音交替を通して基底形をおなじくする子音のつづり字を不変としていることから、以下、便宜的に、子音字と関連づけて提示する。強形・弱形をもつ子音字を「交替子音字」(cambiarine) という。どの子音字が変化子音字であるかは方言によってことなる。以下、渡邊 (2017, pp.7-9) でおこなった記述をもとにして、一部を修正・増補して述べる<sup>9</sup>。まず交替子音字の一覧表をかかげる。

表 1：交替子音字一覧表

書記素 (grafemu)	強形 / 例 (名詞)	弱形 / 例 (定冠詞 + 名詞)
b	[b] / bancu [b'anku] 「ベンチ」	[w] / u bancu [uw'anku]
c (+a, o, u) ㊦, ch (+e, i)	[k] / casa [k'aza] 「家」 chimica [k'imiga] 「化学」	[g] / a casa [ag'aza] a chimica [ag'imiga]
c (+e, i)	[tʃ] / cena [tʃ'ɛna] 「夕食」	[dʒ] / a cena [adʒ'ɛna]
chj ㊦	[c] / chjostru [c'ostru] 「修道院」	[j] / u chjostru [uj'ostru]
d	[d] / donna [d'onna] 「女」	無音 / a donna [a'onna]
f ㊦	[f] / fine [f'ine] 「終わり」	[v] / a fine [av'ine]
g (+a, o, u)	[g] / gara [g'ara] 「駅」	無音 / a gara [a'ara]
ghj ㊦	[j] / ghjente [j'ɛnte] 「ひとびと」	[j] / a ghjente [aj'ɛnte]
gu	[gw] / guerra [gw'erra] 「戦争」	[w] / a guerra [aw'erra]
p	[p] / pace [p'adʒɛ] 「平和」	[b] / a pace [ab'adʒɛ]
qu	[kw] / quartu [kw'artu] 「4分の1」	[gw] / u quartu [ugw'artu]
s ㊦	[s] / sera [s'ɛra] 「宵」	[z] / a sera [az'ɛra]
t	[t] / terra [t'erra] 「大地、地球」	[d] / a terra [ad'erra]
v ㊦	[b] ([v]) / verità [berid'a] 「真実」	[w] / a verità [awerid'a]
z	[ts] / ziu [ts'iu] 「おじ」	[dz] / u ziu [udz'iu]

一覧のなかで、注意を要するものについて以下にのべる。上記で例となっている語形はいずれも北部のものである。南部では表中で ㊦ の記号のついた子音字のみが交替子音字であり、それ以外の子音字に関してはつねに強形を用いるほか、㊦ のついた例でも実際の音はちがっている場合がある。たとえば、北部では b の強形と v の強形の区別がないが、南部ではそれらの区別があるので、verità [verit'a] となる。しかし、北部に [v] の音がないわけではなく、f の弱形として

<sup>9</sup> Gaggioli (2012) のような規範文法、Papi (2017) のような学校文法でも同様の記述がなされている。



は使われる。

chj の強形 [c] は、硬口蓋に舌背をつけて破裂させる無声子音である。学校教育では [tj] による発音も許容されているが、その方式では chjamu [c'amu] 「わたしは呼ぶ」と ti amu [tj'amu] 「わたしはきみを愛する」のような最小対が弁別できない。ghj の強形、chj の弱形 [j] は硬口蓋に舌背をつけて破裂させる有声子音である。[dj] による発音も許容されているが、その方式では ghjalettu [jal'ettu] 「若鶏」と dialettu [djal'ettu] 「方言」のような最小対が弁別できない。また、chj、ghj は語頭の弱形環境では弱形になるが、語中では強形のままにするのが普通である。ochju ['ocu] 「目」、maghju [m'aju] 「5月」。なお、これら chj、ghj のつづり字、ならびに [c]、[j] という音価は、コルシカ語を特徴づけるものと考えられており、Marchelli & Geronimi (1971) によって「イントリッチアーデ」(intricciate; 字義的には「入り組んだ文字」と命名された。

上記のような記述は、実用上の許容範囲のなかで、現象をおおまかに理解するためのものであり、実情としてははるかに多様な使用がなされている。たとえば、表1では強形 [d] に対応する弱形は「無音」としてあるが、実際には、pede 「足」を例とすれば、コルシカ島の諸方言には、[p'ede], [p'ede], [p'e<sup>δ</sup>e], [p'e<sup>ε</sup>e], [p'e<sup>ε</sup>e], [p'e<sup>ε</sup>e] のように、[d] と無音とのあいだに、あたかも連続体のように弱化のさまざまな中途段階がみられる<sup>10</sup>。弱化の度合いは、おなじ町に住む話者のあいだでも、たとえば [p'ede] ~ [p'e<sup>δ</sup>e] ~ [p'e<sup>ε</sup>e] のようにいくらか幅があり、自由変異体を構成しているとみなすことができる<sup>11</sup>。

### 3. 2 『新コルシカ言語地図』(NALC) をもちいた事例研究

本節では、言語地図をもちいて子音弱化の実情の一端を確認するとともに、若干の考察をくわえることにする。使用する言語地図は、『新コルシカ言語地図』(Dalbera-Stefanaggi & Poli (dir.) (2007-2017) : *Nouvel atlas linguistique et ethnographique de la Corse*, 略称 NALC) である。NALC はコルシカの言語地図として最新であり、過去最大規模 (350 地点、3500 問) の調査にもとづいて編纂されている<sup>12</sup>。また、コルシカ大学のホームページの一角にある *La base de données langue corse* (略称 BDLC) で NALC のデータを検索できるほか、一部の音声資料も公開しているという利点もある。事例としては、子音体系のなかで相対的に「強い」位置にあるという理由から、無声閉鎖子音、および有声閉鎖子音を基底とする例をとりあげる。

#### 3. 2. 1 無声閉鎖子音を基底とする例 : i capelli の場合

無声閉鎖子音を基底とする例として、NALC (vol.1, p.44) の i capelli 「定冠詞+髪の毛(複数)」をとりあげてみよう。capelli にふくまれるすべての子音が注目され、とくにはじめのふたつが弱化現象の対象となる。観察されるおもな方言形として、つぎのようなものがあげられる。以下の

<sup>10</sup>Dalbera-Stefanaggi (2002, p.33) を参照。

<sup>11</sup>木村 (2017) は、スペイン語における有声閉鎖音音素 /b/, /d/, /g/ ならびに半母音音素 /y/, /w/ について、閉鎖音、破擦音、摩擦音、接近音のすべての異音が許容されることをスペイン語話者 50 名に対する知覚実験によって示しており、コルシカ語の子音交替の連続性との類似が感じられる。

<sup>12</sup>Gillieron & Edmont (1914-1915)、Bottiglioni (1933-1942) など先発の言語地図との比較については、Dalbera-Stefanaggi (2007) を参照。

提示はおおむね北から南への順による。

### 1/ [ikab'elli]<sup>13</sup>

この形はコルシカ岬半島のサンタ・マリーア・デイ・ローダ (Santa Maria di Lota) で観察される。capelli の第2の子音が [b] へと弱化しているのに対して、語頭の子音は強形 [k] のままである。語中の母音間でおきる子音弱化と、(冠詞などの無強勢音節のあとで) 語頭子音におきる弱化で性質がことなり、由来もことなる。Dalbera-Stefanaggi (2001, pp.109-110) によると、西ロマンス語的な弱化は、語中の母音間でしかおきないのに対し、イタリア半島中南部(周辺部トスカーナもふくむ)にみられる近代的な弱化は、語頭子音にもおきるという。したがって、[ikab'elli] は、リグーリア方言などの影響をうけた、西ロマンス語的な弱化であると考えられる。

### 2/ [igab'elli] に類する形

バスティーア (Bastia)、カルビ (Calvi)、コルティ (Corti)、オルメータ (Olmata) など、コルシカ岬半島をふくむ北部にひろく分布し、コルシカ島全体でもっとも多くみられる形である。capelli のはじめのふたつの子音が子音交替によって弱形 [g]、[b] になっている。

### 3/ [ikap'elli] に類する形

この形式には、語彙的な基底形がそのままあらわれている(すなわち、いずれも強形である)。アヤッチュ (Aiazzu)、マリニャーナ (Marignana)、セリエーラ (Serriera) など、おもに中東部に分布している。

3.1節でみたようなチスモンテ、プモンテの南北二分法による一般的提示には、2/ と 3/ の形しか出てこない。このような記述には、人口的なヴォリューム・ゾーンをおさえている(とくに、南北2大都市であるアヤッチュ、バスティーアの類型をおさえている)という点で一定の利点はあるものの、実際におこなわれている変種の多様性をとらえるにはほど遠い。また、南北二分法では、アヤッチュはプモンテの中心ということになるが、さきにみた詳細な方言区分では、ターラヴ方言圏と中北部方言圏の境界に位置する推移的な形にすぎないことになる。もっと踏みこんでいうと、i capelli に関しては、[ikap'elli] という形をもちいるアヤッチュは、周囲を 5/ の [ikap'edi] に類する形をもちいる地点にとりかこまれているので、一段北方的な形を用いる特異点であるともいえる。

### 4/ [ikkapp'elli]

この場合のように、「弱い位置」にあるにもかかわらず、基底形以上に子音が強化されている事例がある。ここでは、基底形 /k/ が [kk] に、/p/ が [pp] へと強化されている。調査地点としては、ベッツァーニ (Vezzani) が該当する。ベッツァーニは弱化がおきる地域の周縁部にあたる(弱化がおきない地域に近い)。Dalbera-Stefanaggi (2002, p.112) によると、弱化がおきる地域をとりまくように「子音弱化に抵抗を示す地域」が散在し、近隣でおきている弱化に対する拒否反応があらわれているとのことである。[ikkapp'elli] における子音強化もその反応の一環であると考えられる。

<sup>13</sup>NALC では二重子音を [c̄] のようにマクロンで表記しているが、ここでは本稿のなかでの一貫性のため、[cc] のように表記することとする。

### 5/ [ikap'ɛdi] に類する形

サンタンドレーア・ドゥルチーナ (Sant'Andrea d'Urcinu)、ブグニャー (Bucugnà)、オーガナ (Ocana) など、中部の南西がわに見られる。2.1 節でみたように、語源的な -LL- を -dd- にするのが南部全般の特徴であったが、実際には [dd] ではなく [d] が出現している。Dalbera-Stefanaggi (2002, p.86-87) および同 (2015, pp.408-412) は子音の強弱の対立が解消されることをターラヴ方言圏の特徴であるとしているが、[ikap'ɛdi] に類する形が分布している地域はターラヴ方言圏より北である。

### 6/ [igap'ɛdi] に類する形

5/ のすぐ南、ソッチャ (Soccia)、グラナッチ (Granacci)、クツァーナ (Cuzzanu) など、ターラヴ方言圏にみられる。Dalbera-Stefanaggi (2002, p.112) はソッチャではむしろ語頭子音の「強化」がおきるといっているが、ここでは逆に、語頭子音のみが弱化している<sup>14</sup>。

### 7/ [ikapi'qdi] に類する形

マッダレーナ (Maddalena) 島をふくみ、ブニファーツィウ (Bunifaziu) をのぞくコルシカ・ガッルーラ方言圏に分布する形である。極南部に特徴的なそり舌音の [qd] があらわれている。

### 8/ [ikav'eli]

この音はブニファーツィウ (Bunifaziu) のみで観察される。ブニファーツィウ方言は 2.2 節でのべたように、リゲーリア的な方言の孤島を形成しており、一般的に特異な形があらわれることが多い。[ikav'eli] という音は西ロマンス語的な弱化を反映している。西ロマンス語的な弱化は語中の母音間でしかなされず、語頭の子音は強形 [k] のままであることにも注目しよう。

ここで、1/ でみたサンタ・マリーア・ディ・ローダでの形、[ikab'elli] を思い出そう。1/ のコルシカ岬半島と 8/ のブニファーツィウという、コルシカ島の南北両端に西ロマンス語的な弱化のみをこうむった形がのこっており、イタリア半島中南部に由来する近代的な弱化が島の両端にはおよばなかったと考えられる。

## 3. 2. 2 有声閉鎖子音を基底とする例：a donna の場合

つぎに、有声閉鎖子音を基底とする例として、a donna 「定冠詞+女」(NALC, vol.1, p.41) をとりあげてみよう。観察されるおもな方言形として、つぎのようなものがあげられる。以下の提示はおおむね北から南への順による。

### 1/ [aδ'onna] に類する形

ムルスイーリア (Mursiglia)、オルメータ (Olmata) などコルシカ岬半島から、セルマーヌ (Sermanu)、ヴィワリーウ (Vivariu) など島の中部にかけて点在する。/d/ が摩擦音化しており、弱化への一歩をふみだした形であると見なすことができる。

### 2/ [ad'onna] に類する形

バステイーア (Bastia)、ルリアーナ (Ruglianu) などコルシカ岬半島から、レンヌ (Rennu)、ギ

<sup>14</sup>BDLC に登録されている Soccia の方言形 444 例のうち、[igap'ɛdi] のように、「語中にある弱化が期待される子音が弱化しておらず、語頭のみ弱化している」という例はほかには皆無である。したがって、当の Soccia においても [igap'ɛdi] という例は特異であり、体系的な説明に回収しがたい。

ゾーニ (Ghisoni) などの中部にかけて分布する。子音は基底形のままであり、弱化していない。コルシカ島の北端のコルシカ岬半島で実際に見られるのは、2/ か 1/ の形であるので、一般論として「北方ほど弱化がいちじるしい」といわれるのに反して、コルシカ岬半島はどちらかという弱化をしない地域というべきである。

### 3/ [a<sup>h</sup>onna]、[a<sup>l</sup>onna] に類する形

リーズラ (L'Isula)、コルシヤ (Corscia) など北部、ベーナグ (Venacu)、アレーリア (Aleria) など中部に分布する。Aiacciu もこの形である。/d/ の弱化の第2段階ともいえるべき形であり、摩擦音化、または流音化した音がさらに副次的調音にまで弱められている。

ここで、3.2.1 節でもみたアヤッチュの特異性がふたたび注目される。アヤッチュでは a donna を [a<sup>h</sup>onna] としているが、その周辺ではおもに 1/ のタイプである [a<sup>h</sup>onna] に類する形がおこなわれている。つまりここでもまた、アヤッチュは一段北方的な形を用いている特異点なのである。その理由としては、アヤッチュという都市が、グラウォーナ川流域を後背地とする中心性をもち、中北部方言圏とつながっていることがあげられるであろう。

### 4/ [a<sup>l</sup>onna] に類する形

ガレーリア (Galeria)、パトリモーニウ (Patrimoni) など北部から、コルティ (Corti)、リングイレッツァ (Linguirezza) など中部にかけてひろく分布する。/d/ の弱化がその極致に達し、完全に消滅している。弱化がもっとも進んだ地域であるといえる。

### 5/ [ad<sup>h</sup>onna] に類する形

アウッデー (Auddè)、ソッタ (Sotta) など、ターラヴ方言圏からコルシカ・ガッルーラ方言圏に分布する。地域が離れているので別扱いしたものの、いま問題としている子音だけをみると 2/ と同じく基底形のままであり、それゆえ 2/ とあわせるともっとも広く分布する形ということになる。

### 6/ [ad<sup>h</sup>onna] に類する形

スッダカロー (Suddacarò) などターラヴ方言圏、ならびにサルテー (Sartè)、ブニファーツィウ (Bunifaziu) などコルシカ・ガッルーラ方言圏に分布している。基底形にある -nn- を [n] にしているのは、ターラヴ方言圏に特徴的な子音の強弱の混同の一例であると考えられるが、donna の例に関しては、その混同がコルシカ・ガッルーラ方言圏にもひろがっている。

以上でみてきた a donna の方言的変異についてまとめると、北中部の弱化がおきる地域のなかでも、その態様は 1/、3/、4/ のようにさまざまである。一方、弱化がおきない地域 2/、5/、6/ がひろく存在するが、コルシカ岬半島、ターラヴ方言圏、コルシカ・ガッルーラ方言圏という、いずれも周辺的な地域であり、それらの地域には語頭に作用する近代的な弱化の影響がおよばなかったと考えられる。3.2.1 節でみた [ikkapp'elli] のような、明確に弱化に抵抗を示した痕跡はみられないが、これは出発点となる基底形が有声閉鎖音という、無声閉鎖音より一段弱い音であったことが作用しているかもしれない。

また、二大都市であるアヤッチュとバスティーアについていうと、南北の二分法において北部で弱化が多くみられるという一般的な図式に反して、この事例に関しては前者でのみ弱化がおきていることにも注目するべきであろう。

これらの特徴は、3.1 節でみたような一般的提示ではとらえきれないものであり、それぞれの

事例に即した詳細な記述が必要となるゆえんである。

#### 4. おわりに

本稿では、コルシカ語方言学の手はじめとして、強勢母音の体系の地域的差異をもとにした方言（圏）の区分を確認したあと、本稿が関心をいだく現象である子音弱化について、最新の方言地図に即して事例研究をおこなった。その結果、コルシカ語の方言区分についても、子音弱化についても、一般的な特徴づけとして伝統的に通用しているチスモンテ・プモンテの二分法がそのままでは通用しないことを示し、より詳細な方言的変異の諸相を明らかにすることができたと思われる。閉鎖音以外を基底とする子音弱化の問題、さらにはコルシカ語の諸方言を特徴づけるもうひとつの側面である母音変化 (svucalatura) の問題など、本稿で扱えなかった問題については、稿をあらためて論ずることとしたい。

#### 参考文献

- Bottiglioni, Gino (1933-1942) : *Atlante Linguistico Etnografico Italiano della Corsica*, 10 vols, Società tipografica modenese.
- Culioli, Antoine Louis et alii (2009) : *U Maiò : Dictionnaire français-corse*, D.C.L.
- Culioli, Antoine Louis et alii (2010) : *U Minò : Petit dictionnaire français-corse, corsu-francese*, D.C.L.
- Culioli, Antoine Louis et alii (2012) : *U Maiori : Dizziunariu corsu-francese*, D.C.L.
- Dalbera, Jean-Philippe (2007) : « Linguistic Atlases – Objectives, Methodes, Resultes, Prospects – », Yuji Kawaguchi et alii (éds.) *Corpus-Based Perspectives in Linguistics*, John Benjamins, pp.39-54.
- Dalbera-Stefanaggi, Marie-José (1978) : *Langue corse : une approche linguistique*, Klincksieck.
- Dalbera-Stefanaggi, Marie-José (1991 / 2015) : *Unité et diversité des parlers corses*, Piazzola.
- Dalbera-Stefanaggi, Marie-José (2001) : *Essais de langue corse*, Piazzola.
- Dalbera-Stefanaggi, Marie-José (2002) : *La langue corse*, P.U.F. (訳書：渡邊淳也訳 (2020) : 『コルシカ語』白水社)
- Dalbera-Stefanaggi, Marie-José (2007) : « From the Linguistic Atlases to the Database, and vice versa », Yuji Kawaguchi et alii (éds.) *Corpus-Based Perspectives in Linguistics*, John Benjamins, pp.55-65.
- Dalbera-Stefanaggi, Marie-José & Muriel Poli (dir.) (2007-2017) : *Nouvel atlas linguistique et ethnographique de la Corse*, 4 vols., Éditions du CTHS.
- Gaggioli, Ghjaseppiu (2012) : *La langue corse en 23 lettres*, Albiana.
- Gilliéron, Jules G. & Edmond Edmont (1914-1915) : *Atlas linguistique de la France : Corse*, 2 vols., Champions.
- 長谷川秀樹 (2003) : 「コルシカ語の音韻的特性について」『ロマンス語研究』36, pp.57-66.
- 木村琢也 (2017) : 「有声閉鎖音素 /y/, /w/」日本イスペインヤ学会第63回大会発表ハンドアウト.
- 小林標 (2019) : 『ロマンスという言語』大阪公立大学共同出版会.
- Marcellesi, Jean-Baptiste (1984) : « La définition des langues en domaine roman », *Actes du Congrès de Linguistique et de Philologie Romanes*, vol. 5, Université de Provence, pp.307-314.
- Marchelli, Pascal & Geronimi, Dominique Antoine (1971) : *Intricate à cambiarine*, Beaulieu.
- Martinet, André (1970 / 1986) : *Élément de linguistique générale*, Colin.
- Martinet, André (1955 / 2005) : *Économie des changements phonétiques*, Maisonneuve.
- Melillo, Armistizio Matteo (1977) : *Corsica (Profilo dei dialetti italiani, vol. 21)*, Pacini.
- Ottavi, Pascal (2010) : « Langue corse et polynomie », *Cahiers de sociolinguistique*, 15, pp.87-96.
- Papi, Ernestu (2017) : *Grammatica pratica di a lingua corsa*, Clémentine.
- Patota, Giuseppe (2004) : *Lineamenti di grammatica storica dell'italiano*, Il Mulino. (訳書：岩倉具忠監修)

(2007) : 『イタリア語の起源』 京都大学学術出版会)

Rohlf, Gerhard (1966-1969) : *Grammatica storica della lingua italiana e dei suoi dialetti*, 3 vols., Giulio Einaudi.

菅田茂昭 (2019) : 『ロマンス言語学概論』 早稲田大学出版部 .

Thiers, Ghjacumu et alii (1984 / 2014) : *u Muntese : Dizziunariu corsu-francese*, Albiana.

渡邊淳也 (2017) : 『コルシカ語基本文法』 早美出版社 .

渡邊淳也 (2019) : 「ことば紀行 (40) コルシカ語」『パブリッシャーズ・レビュー : 白水社の本棚』 79, p.6.

#### ウェブサイト (データベース)

*BDLC. La base de données langue corse.* ( <https://bdlc.univ-corse.fr/> )

*INFCOR. Banca di dati di a lingua corsa.* ( <http://infcor.adecec.net/> )